

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話18

およそ四千年前、既に
サケを捕獲していたという石狩。
この地の代表的な郷土料理
「石狩鍋」の縁起とは…。

北海道を代表する鍋

北海道を代表する鍋料理といえば「石狩鍋」。寒い冬の季節にはピタタリの食べものだ。サケの身のぶつ切りやアラをメインに、キャベツやタマネギ・ジャガイモなどの野菜類、それに豆腐・コンニャクなどを加え、コンブだしの味噌味でいただく。とてもシンプルだが、焼いたサケとはまた違ったおいしさが楽しめる。ハクサイやサトイモを入れる本州の鍋とは異なり、キャベツやジャガイモを入れるのが、いかにも北海道らしい。

身体は温まるし、ヘルシーだし、それに鍋というのは、なぜか黙々と食べる人が余りいない。無口な人も、ついついお喋りになってしまうというのが鍋料理の特徴であり、話をしながら食べると、なお一層おいしくいただける。

縄文時代からサケを食べ、長い歲月付き合ってきた石狩では、魚の臭みや味噌臭さを抑え、うま味を引き出すために、山椒をかけて鍋を食べるといふ。

ところでこの鍋料理の名前だが、全国を見ても「フグ」とか「カキ」とか食材の名前がついたものがほとんど。地名で呼ばれるものといえば、「石狩鍋」のほかには、ほとんど見当たらない。

堂々と郷土の地名を冠した「石狩鍋」は、どのような変遷を経て現在の形になり、いつ頃から登場した鍋料理なのだろう。

石狩鍋という名前は戦後から

この「石狩鍋」、元々は漁師が作業の合間に食べる「だいなべ」（大鍋、台鍋）と呼ばれる醤油や塩味がベースの料理だったそうだが、意外なのはネーミングが結構新しいということ。かなり昔からそう呼ばれていたと思いがちだが、何と戦後に付けられた名前だというのだから驚きだ。

「石狩鍋」のそもそもの始まりは、昭和二十年代後半、当時人気のサケ地引網漁を見にやって来る観光客のために鍋料理を出したことから。地引網漁は、引き終わるまで時間がかかるため、それを待つ間、観光客にその鍋を「石狩鍋」と名付けて提供したことが、そのきっかけだったとか。

「石狩鍋」の命名に関しては、気の利いた地



地引網漁（石狩市役所提供）

元の人が「石狩鍋」と呼んだとか、自然発生的に付いたんだとか、いろいろな説がある

石狩鍋だけが全国に知られ、
親しまれているのは、
「石狩」がサケと「蝦夷地」を
強く連想させるからである

ようだが、いずれにしろ観光客には大好評。その後、石狩町（当時）が「さけまつり」キャンペーンで盛んに宣伝したり、札幌の料理店が「北海道名物」として取り上げたりしたことで、急速に広まっていった。

この「石狩鍋」という言葉が『広辞苑』に初めて取り上げられたのが昭和五十八年。これも意外だ。国語辞典に認められてから、わずか三十年しか経っていない。

このように「石狩鍋」は全国的に見れば、とても新しい食べ物、いわば戦後の新商品なのだ。それがなぜ全国に普及するようになったのか？

その理由は、冷凍技術と流通機構の発達にあった。冷凍の生ジャケが簡単に手に入り、手軽に味わえるようになったため、今や「石狩鍋」は、北海道から沖縄まで、海・山どこでも食べることができる。かつて「アラ」の旨さを味わえるのは、鮮魚が豊富な



石狩鍋

地方の特権であったが、それを全国に広めた石狩鍋は、まさに革命的な料理といえるのだ。

ネーミングの妙

「石狩鍋」が受け入れられた理由のひとつにネーミングがある。江戸時代に石狩から運ばれた大量のサケが、「蝦夷地」には獲り切れないほどの天然資源が溢れているというイメージを植え付けた。やがて「サケ」と「石狩」と「蝦夷地」は、同義語になった。「石狩鍋」は「蝦夷地鍋」でもあるのだ。サケを材料にする味噌味の鍋物は、サケの獲れる地域ならどこにでもあるはずだが、石狩鍋だけが全国に知られ、親しまれているのは、「石狩」がサケと「蝦夷地」を強く連想させるからである。

東京の民間企業、ブランド総合研究所が実施した地域ブランド調査（二〇〇六年）では、「石狩鍋」は郷土料理部門で全国五位にランクインし、一〇人に一人は食べてみたいと回答している。

さらに朝日新聞のアンケート『好きなご当地鍋』（〇七年）では第一位、gooの『一度は食べてみたい全国のご当地鍋ランキング』（一一年）でも第一位に輝いている。

この結果に石狩市は、観光振興計画の重点事業として、「石狩鍋復活プロジェクト」を〇七年からスタートさせている。

温かい食べ物がいっぱいある北海道。家族や親しい仲間と食べる石狩鍋の味とぬくもりを道産子誰もが体験しているのではないだろうか。

あつろの 杜 須崎 隆志さん

「札幌文学」同人

Interview

千歳市の焼鳥店の店主で小説家の須崎隆志さん。五十歳を過ぎてから書き始め「小説を書いていたからつつまらない人生だったでしょうね」と語る須崎さんのお話です。

九州・東京そして北海道

長崎県西彼杵半島地域にある崎戸町という炭鉱島で生まれ育ちました。高校を出る十八歳までです。佐世保で予備校の寮に入り、その後北九州大学に入学したんですが、お金がなくて、生活費をアルバイトで稼がなければならなかった。六年間大学にいたんですが結局中退し、すぐ東京に出て、いろんな職種をこなしました。そして昭和五十一年の六月、三十三歳の時に結婚。翌年に長男が生まれ、次の年の三月に二男・三男が生まれました。双子です。男の子が二年で三人。生活していけないですよ。じゃあ家内の実家のある千歳に帰ろうと。それで五十二年九月に千歳に来たんです。

当時二チイにあった、神戸が本社ของเกมセンターに採用され、そこに七年間いたのですがそれが倒産してしまって。それで昭和六十年に焼鳥屋を始めた。それからもう二十八年経つんですね。

「札幌文学」同人

作家の井上光晴さんと同郷なのですが、先生が札幌に来て文学伝習所を開講することになり、受講生を募集していたんです。先生が来るなら行かなくちゃあだめだと思っただけで、北九州から先生を東京まで訪ねて行ったことがあるんです。

未来を見据え 過去をいつくしみ 現在を楽しむ…



須崎隆志
すぎきたかし

1941年、長崎県崎戸町(現西海市)生まれ。63年北九州市立北九州大学商学部入学。69年同校中退。同年上京。業界紙記者・建築会社営業等、職を転々とし、77年、千歳市に移住。85年、焼鳥屋を開業。現在に至る。「札幌文学」同人。「千歳市民文芸」同人。【執筆歴】1991年10月「森の上の蒼い海」がNHKラジオ札幌放送局「北の本棚」で朗読される。2004年長崎新聞新春文芸作品に「背中の号泣」が入選、同紙に掲載。2005年～08年「文学界」全国同人雑誌作品ベスト5に「笑うエゾリス」「薄明の中で水たまりが」「暗い部屋にたどり着くまで」。2011年「それぞれの片道切符」(「千歳市民文芸」)が第34回千歳市民文芸賞を受賞。同年「言霊居酒屋」(中西出版)出版。



でも、すごく歓迎してくれました。「まずチエーホフを読みなさい」「五〇枚ぐらいの短編を書いて持つてきなさい」などと言われました。その時がチャンスだったんですが、当時は小説をまったく書いていませんでしたから、それっきりで終わってしまいました。しかし、井上先生が札幌で文学伝習所を開くと聞いたものから、受講したんです。その時に受講生の有志で同人誌のようなものを創り、その中で活動していたのですが、だんだん尻すぼみになっていった。そのままやめるのもつたいないと思いい、次に朝日カルチャーの小松茂さんが講義して

る小説の実践講座に入りました。その後別の所に移ったりと転々としていたのですが、小松先生から電話があり「札幌文学に來ないか？」と誘われました。最初に書いた、海を泳いで渡る話の『森の上の蒼い海』が非常に印象に残ったようなんです。それで札幌文学に移りました。平成十四年のことです。

小説の創作方法

作品の発想は一年前とか二年前。構想や場面設定はだいたい半年前から三か月前ですね。前の作品がまだ終わらないうちに書き始めています。少なくともこの場面だけは書いておこうとか、この言葉だけ記しておこうとか、忘れてしまわないうちに書いておきます。去年どのくらい書いたか数えてみたら五〇〇枚ぐらい書いています。

テーマから書き始める場合もあるし、ある一つの言葉を使いたいために場面設定・文章などを書き出すという場合もあります。店の中で聞いて出てきた言葉もあります。それにテレビドラマのちよつとしたセリフ・言葉。でも、それをそのまま使うわけにはいけません。ちよつと変えて使おうとかね。いろんなパターンがあります。実際の話とは少しずつ変えています。

す。例えば『言霊居酒屋』にはいろんな人物が出てきますが、特徴はあの人、言った言葉はこの人、境遇・人物設定は全く別の人など、いろいろ組み合わせています。

一番楽しいのは構想を練っている時。最初の発想が出てきて、それをどういう具合に持っていこうとかかね。でも実際に書き始めたら、もう苦しみでしかありません。

時間が無いんです。朝起きて食事が終わった十時半から十一時半ぐらいまでの一時間が書く時間です。今はその間でしか書けない。それから図書館に行つてちよつと調べたりして、帰ってくるのが一時半。食事して二時から店の仕込みですからね。

モットー

六十歳半ばを過ぎて七十歳に差し掛かった時に自分のモットーとしたのが、「未来を見据え過去をいつくしみ 現在を楽しむ」。そういう生き方ですよ。七十歳を過ぎたらそういう覚悟でないと。

芥川賞を取った黒田夏子さんは七十五歳で新人ですよ。だから私もまだまだ可能性がある。でも、やはりもう先が無い、とにかくまだ頭が少しでもはつきりしているうちに書いておかないとね、という思いがありますね。

「かい」なの「がい」なの？

最近変わってきた言葉の中に「本」分「階」「羽」等の助数詞の読み方があります。「ほん」なのか「ぼん」なのか、「ぶん」なのか「ぶん」なのか、「かい」なのか「がい」なのか、はたまた「わ」なのか「ば」なのか…。前につく言葉で読み方が変わるわけですが、これがなかなかややこしい。

例えば「本」の場合、「二本(ほん)」「三本(ほん)」「四本(ほん)」と、それぞれ読み方が異なります。

では「何」という語が前についた場合はどうなるでしょう。

「何本(ほん)」「何分(ぶん)」「何階(がい)」「何杯(ばい)」「何敗(ばい)」「何羽(は)」と読むのが普通です。

この間、ラジオの収録があり、この問題に遭遇しました。今の若者は、ほとんど濁らずに、「なんほん」「なんぶん」「なんかい」「なんはい」「なんわ」と発音するようなのです。濁って読むと言いにくいし、逆に違和感があるとか…。合理的に統一してしまっているわけです。

読み方ではありませんが、イカの数え方も面白いですよ。生きているイカだと、「二匹」「二匹」。これが市場などに出る食べ物としてのイカになると「二杯」「二杯」。難しいものです。

このように助数詞の使い方は複雑怪奇で、法則など存在せず、聞き覚えた慣習による使い方しかないのです。しかし、この慣習というものが今ではすっかり薄れてしまいました。そのうち助数詞を正確に遣い分けられる人はいなくなるでしょう。

ではここで問題です。あなたはこれをどう読みますか？

- ①「三軒」②「三件」③「三階」④「三回」(答え ①さんげん ②さんけん ③さんがい ④さんかい)

O W L I N F O R M A T I O N

直木賞作家・佐々木譲氏による電子絵本プロジェクト

図書館の子 [電子書籍版] [絵本版]

文:佐々木譲 絵:蒲原みどり 音楽:竹本利郎 [電子書籍版] 350円 (iPad対応) [絵本版] 3,675円 (税込) B5判、化粧箱入

直木賞作家・佐々木譲氏を中心とし、出身地北海道の有志とともに「道産」電子絵本を発行している「Joh's Picture Book Project」。

2010年の第1作「サーカスが燃えた」は佐々木氏唯一の童話作品(未発表)で、配信直後のiTunes StoreのiPadアプリランキングで総合1位を獲得。2011年の第2作「はるがくる」は原作シナリオを北海道内で一般公募、佐々木氏監修のもと絵と楽曲を添え好評を博しました。

待望の3作目は佐々木氏書き下ろしの物語で、吹雪の図書館にひとり閉じ込められた少年の一夜の不思議な体験を描いたもの。作画に札幌在住の画家で装幀家の蒲原みどり氏を起用、音楽には札幌を拠点とする国際的チェリスト・竹本利郎氏を迎え、冬に相応しい幻想的な作品となっています。

リリースを記念し数量限定で絵本版を発売。化粧箱に収められた絵本は紙芝居仕様で、サウンドトラック収録のCDが付いています。



電子書籍版はApp Storeで配信中。「サーカスが燃えた」は無料、「はるがくる」は170円。絵本版は図書館の子オンラインショップまたはAmazonなどで販売中。詳細は「Joh's Picture Book Project」http://jpbp.org/まで。

18人の作家による多彩な山の魅力

山に魅せられた画家たち

1月25日(金)～3月24日(日) 9:30～17:00 (入場は16:30まで)
北海道立帯広美術館(帯広市緑ヶ丘2番地 緑ヶ丘公園 TEL 0155-22-6963)
休館日/月曜日(2月11日は開館)、2月12日
観覧料/一般900円、高大生550円、小中生250円
※団体料金(10名以上)あり。障害者手帳受給者は無料。ほか各種割引制度あり



一原有徳(Mt. Muridake)1987年

古来より山と日本人との関わりは深く、季節や天候、あるいは見る場所によって表情を変える美しい姿は、人々に親しまれ、多くの画家に描き続けられてきました。日本の象徴である富士山や日本アルプスは特に登山家・風景画家を惹きつけ、様々な画家が筆をとる名山です。

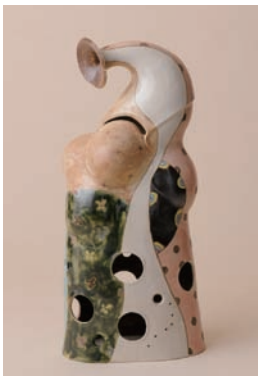
北海道の雄大な自然に魅せられた画家も多く、大雪山や十勝岳、トムラウシなどは道内外の多くの画家に題材とされてきました。

本展は江戸時代の葛飾北斎などの浮世絵にはじまり近代以降まで、山に想いをもって制作に臨んだ18人の作品約90点を展示。また北海道を代表する登山家であり、帯広市がある十勝平野を抱く日高山脈を幾度となく題材とした画家・坂本直行と版画家・一原有徳を、登山と作品の両側面から取り上げ、多彩な山の魅力を紹介します。

心ほっこのり陶芸作品展

石川久美子展 感じる土のチカラ

2月8日(金)～3月19日(火) 9:00～17:00(土・日・祝日 休館)
北海道文化財団アーツスペース(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3階 TEL 011-272-0501) 入場無料



音器(オンキ)(2008年) H69xW32xD22mm

「作品を見ると癒やされる」「心が弾む」。そんな作品を作り出しているのが、函館に工房「studio claynote」を構える陶芸作家・石川久美子さんです。

東京での生活を離れ、函館に帰郷した石川さんが陶芸と出会い、作家活動を始めたのは2003年のこと。海外研修を経た後、2010年に独立し精力的な活動を続けています。作品は抽象的なオブジェのほか、動物の置物や食器などの日常使いの小物まで多岐にわたり、独特の曲線を描く輪郭と、陶芸用のクレヨンなどで彩色された優しい色合いの焼き物たちが見る人々の目を和ませ、心をほっこりと温めます。

今回の作品展では「音器」などのオブジェ作品のほか、6色の釉薬でカラフルに塗り分けられた動物の置物などを含む約10点を展示。オリジナリティを追求し、進化を続ける石川さんの世界をぜひご覧ください。

おすすめ本

懐かしの北海道鉄道の旅 明治・大正・昭和期

矢島睿・著
中西出版
定価1,260円 (税込)
A5判、242頁
2012年11月刊行



“旅”と“歴史”と“鉄道”その懐かしき姿… 開拓とともに発展し、北海道の近代史に大きな役割を果たした道内の鉄道。駅舎や汽車旅行から駅弁に至るまで、鉄道とその周辺を生活文化の視点で幅広く考察しています。

5名様 図書カードプレゼント!

「あうる」46号読者の皆さまへ、5名様に図書カード(1000円分)をプレゼント!

図書カードご希望の方は、ご住所、お名前、ご職業、お電話番号、「あうる」をどこでもらったか、また感想を添えて、中西出版までがきまたは、メールにてご応募ください。

なお、ご応募多数の場合は、抽選となります。賞品は、発送をもってかえさせていただきます。どうぞお楽しみに!

締切りは、2013年3月20日まで



札幌市中央図書館が2014年度中に「電子図書館サービス」を実施することになり、今その準備を進めています。2011年から2012年にかけて、札幌市の出版社の協力を得て実施された「実証実験」後の市民モニターアンケートでの感想は次のようでした。「システムの操作性やコンテンツ数については「期待外れ」(54%)だったが、それらを改善するなら「利用したい」(58%)、図書館が電子書籍を提供する事を「希望する」(73%)等。「電子図書館」構想は出版社にとって評価が分かれるところではありますが、利用者が望むサービスだしたら、我々も可能な協力を惜しむべきではないと思います。コンテンツ提供を希望する同館と、市内の出版社が昨年からの協議を進めています。様々な人々とコラボしながら、新しいものを創り出していけたらと願っています。(Y)

発行・編集/中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-14
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
発行責任者/林下英二
発行日/2013年2月12日

http://nakanishi-shuppan.co.jp

